

二〇二六年、最新の《硫黄島》をお届けします。

右写真
奥に摺鉢山（別名：パイプ山）

全国 硫黄島 会報

通巻 第7号 2026年発行
発行 全国硫黄島島民の会
編集 島民3世の会
My Roots is Iwoto Islands.

《硫黄島》の
「月下美人」
げっ か び じん

島民の会会長：西村の曾祖父 奥田留吉さんが硫黄島の西側〈漂流木部落〉にある自宅に植え、それがどんどん増えていった
今はその自宅跡と元山部落に群生地が残る。満月の夜以外にも咲き、年に数回咲く
硫黄島の月下美人は実際は三角サボテンで（結実するとドラゴンフルーツ）、花自体は
月下美人に負けないほど見事で美しく咲きます
写真は2023年（令和5年）8月6日夜に咲いた時のもの 撮影：羽切朋子

イベント

「第十二回小笠原DAY」

「小笠原なかま」が集まる祭典に《硫黄島》も参加！

小笠原フアンの集い「第十二回小笠原DAY」が二〇二六年二月八日に、竹芝客船ターミナルにて雪が降る中（！）開催されました。島の特産品や文化、学びなど各島の魅力がいっぱい詰め込まれた出展に、《硫黄島》も二回目となる参加をさせていただきました。興味を持ってお立ち寄りいただいた皆様、ありがとうございました。🎯

パネル展示 硫黄島関連書籍やグッズの販売、東京工業高専によるVR体験コーナーなど盛りだくさん



【インフォメーション】

- 1 2025年8-9月号「暮らしの手帖」にて特集「帰れない島 硫黄島の日々を語り継ぐ」。一世・齋藤信治さん、一世・渡部敦子さん、3世の会共同代表で芥川賞作家・滝口悠生さんの語り。
- 2 令和8年度も硫黄島遺骨収集がはじまり、今回取材帯同したNHKによりニュース報道されました。
- 3 東京工業高等専門学校が「VR 硫黄島博物館」を制作中。2025、2026年7月に《硫黄島》で計測調査を実施。
- 4 日本文化興隆財団サイト「連載・硫黄島」にて島民の会会長：西村によるエッセイが掲載されています。



資料、情報求む！硫黄島に関することでしたら何でも。

ご自宅にございます《硫黄島》に関する文献、写真、映像等どのような情報でも構いません。現在、『全国硫黄島島民3世の会』では、歴史を風化させないために、貴重な情報を収集し、デジタル・アーカイブ化も含め、次代へつなぐ活動に取り組んでいます。

会員募集！『全国硫黄島島民3世の会』

祖父母の世代が「硫黄島旧島民」でいらっしゃる孫の世代＝三世の皆様へ。2018年に発足致しました『全国硫黄島島民3世の会』では会員を募集しております。共に学び、語り合い、いつの日か一緒に硫黄島を訪れたい。事務局（電話 047-458-3615、islandvideo1976@gmail.com）まで。お待ちしております。

”硫黄島（しま）の歴史を残し、忘れず繋いでいく”（寒川前会長）

本年度より全国硫黄島島民の会会長を”島民三世”西村怜馬が引き継ぐことになりました



《硫黄島》への想いを、一世、二世から

三世、四世へ継承していきます

「全国硫黄島島民の会」は、戦時中の強制疎開によって故郷を離れた硫黄島（北硫黄島を含めた硫黄列島）の旧島民らが親睦と継承を目的に結成した組織です。

1971年に前身となる「硫黄島同窓会」が結成され、毎年9月第2週目日曜日に川崎日航ホテルで「年次総会」が開催されてきました。

その後「硫黄島島民の集い」、21世紀に入って「全国硫黄島島民の会」へと改称、下部組織として旧島民の“孫の世代”らが中心となった「全国硫黄島島民3世の会」も2018年から活動しています。

「全国硫黄島島民の会 引継ぎ30年」

文◎寒川藏雄（全国硫黄島島民の会・前会長）

祖父母両親が硫黄島で暮らして居たと聞いたのは、高校時代。大島へ帰省した時だったと思う。母が話してくれた。旧姓は赤間で9人きょうだいの8番目「岸子」。

祖父は明治生まれで、四国・愛媛で製菓業を営み、和菓子、製パン等を生業とした後、熊本、長崎と渡り、カステラ等洋菓子修行をした。その後、山陰を廻り関東へと流れた。まさに日本版ジプシー生活だった。

東京、千葉へと流れ菓子屋で生計を立てたが、野心旺盛な祖父は“てっぺん”に立ちたい性格の人で、八丈島、小笠原父島へと渡るが、長きにわたるジプシー生活がいったい何年なのか一度も聞いたことがない。

硫黄島にわたった生活でも元山地区で菓子屋を営み、学校給食のコッペパンも卸していたという。こんな話も母の同級生から硫黄島墓参の船の中で聞いた。

昭和24年生まれの子の団塊最後の世代の私は、戦後の余波が続く伊豆大島で生を受けた。

20歳を過ぎた頃から母の兄、赤間孝四郎叔父から同窓会への出席を求められ、川崎の集いへ行くようになった。当時、一世の多くが参加していた。👉



硫黄島同窓会初代会長：篠崎卓郎の子、篠崎允さん（硫黄島生まれ、島民一世）は長年、寒川会長を支えてきた



二世、三世のメンバーがステージに集合。島民の会新人事とともに、新年度より3世の会は共同代表として西村（写真一番左）と滝口悠生（写真左から6番目）の2人が務めることになった



さむかわ・くらおさん

昭和24年 伊豆大島生まれ。島民二世
令和7年度の第54回総会まで全国硫黄島島民の会会長を務めた在任中は毎年の総会運営に尽力。戦前の硫黄島の様子を詳しく記録した『硫黄島クロニクル』の出版や、次世代への継承を目的とした「全国硫黄島島民3世の会」の活動にも貢献されるなど旧島民への深い思いを胸に、会の発展と歴史の継承に大きく寄与された

👉篠崎卓郎会長が務める25回総会が終わった頃、「くらちゃん。役員会があるから来てくれ」と竹芝近くの海員会館に従兄の小俣耕一（耕ちゃん）と共に呼ばれた。

多くの一世代の役員会員の中、二世の2人に賢二叔父（山下賢二）が正面席のサイドに座るように指示があり、座ると同時に「始めろ」と一言・・・私も多分・・・おっちゃんがこの会をやれ！とのメッセージと思ったが、何も伝えられないまま、役員会に集まった一世のメンバーからは反発ばかりが私に降りかかった。

それから30年。

今では、9月の総会では百名を超える出席者に支えられる盛況な会を続けることができた。これも、森下元村長、渋谷村長をはじめとする、多くの方々のご理解によって一世の方々の方会への思いや墓参、慰労を応援することができた。

今後、役員が孫の代である三世に引き継がれ、西村怜馬新会長のもと、「全国硫黄島島民の会」が二世と共に、一世の人達を見守って、硫黄島（しま）の歴史を残し、忘れず繋いでいきたい！👉



川崎の総会名物、硫黄島模型の前で。旧島民一世：森下佳代子さん（中央）と。

新 刊

硫黄島になぜ帰れないのか？

島民の証言と資料から読み解く、傑作ノンフィクション！

文◎羽切学（全国硫黄島島民3世の会）

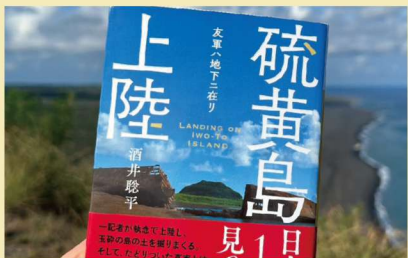
北海道新聞・酒井聡平記者が20年にわたって執念で追い、実際に硫黄島に上陸し、遺骨収集団の一員となり土を掘る。“日本兵1万人の遺骨が見つからない謎”を徹底調査し、「第11回山本美香記念国際ジャーナリスト賞受賞作」となった『硫黄島上陸 友軍ハ地下ニ在リ』（写真下右）から2年。新刊となる『死なないと、帰れない島』が2025年7月に刊行。

川崎の総会に出席するために上京した酒井記者に、荻窪のカレー屋で話を聞いた（写真下左）。

「2006年に硫黄島の取材を始めて今年で20年。でも、ほぼ大半は遺骨問題に関するものだったんです。しかし、2019年の石原俊教授の”島民が帰れない”という講演を聞いて衝撃を受けました」



ナンを見ても『硫黄島』と思ってしまうほどの硫黄島愛



先日、実際に「硫黄島上陸」した前作著書「硫黄島上陸」

島民一世、前々会長山下さんへ報告

島民の会前々会長で現在名誉会長である山下賢二さんに、この度島民の会新会長になる西村がご挨拶に伺いました（2025年10月19日）。



（左）山下家自慢“島で一番大きな”カヌーの模型（賢二さんの自作）。「うちは漁師と農業半分。みんなでトビウオ漁に夜通し行っただよ。子供も仕事してたからね」（中）山下名誉会長（右）西村新会長

西村 わたしのおばあちゃんが菊池康子（きくちやすこ）です。

山下 康ちゃんか？ 懐かしいな。

西村 おじいちゃんは菊池耕一です。

山下 こあんちゃん（耕一さんのあだ名）はいい男だったよ。よく人の面倒見るしね。お酒が好きだったね(笑)

西村 以前、硫黄島に墓参に行った時に賢二さんにガジュマルの木でプランコを作ってもらいました。

山下 ガジュマルって大きな木なんだ。島では嵐がよく来るから、防風林として家に植えたの。5、6年経つとね、大きな株になるんだよね。南方だからね、成長は早いよ。ガジュマルは枝からヒゲみたいなのが出るの。それが地面まで伸びると根っこになっちゃうんだよ。

自分の故郷は誰だっていいとこだらうけど、硫黄島は本当にいいところだよ。冬がないからさ。夏でもね、べらぼうに暑いんじゃないんだよ。島が小さいから、風がね、海を渡ってくる風だから涼しいの。

うちの庭ではメジロがね、上手に歌うんだよね。何十羽も集まって合唱するんだ。今はどうなっているかな？

西村 鳥はまだたくさんいます。

山下 あと各家に飲料水のタンクがあったの。そこにメダカを放しておくの。メダカが住まないような水は飲まない。（硫黄島は）天水だからね。地下水っていうものないからね。

一「今年から島民の会会長を引き継ぐことになりました」と山下さんにお伝えすると「ありがとうございます！よろしくお願いします！」と今日一番大きな声でお応えいただきました。

硫黄島の記憶や歴史、想いを伝えていくことの大切さをあらためて感じた一日となりました。👉

やました・けんじさん

昭和5年 硫黄島生まれ、南部落出身。島民一世
全国硫黄島島民の会名誉会長
写真の「IWO-JIMA」の表記になっている昔の帽子は硫黄島墓参でかぶっていた賢二さんのお気に入り



「そこから“遺骨収集”（＝『硫黄島上陸』）“島民のこと”（＝『死なないと、帰れない島』）を並行して取材するようになり、2冊の著書になりました」

「自分も10代の頃からたくさんの本を読んできました。この本は若者にも是非読んでもらいたい。今回、貴重な古い写真もたくさん載っています」

『死なないと、帰れない島』は、故郷・硫黄島から急に離れなくてはならなくなった「強制疎開」の、映像を見るような詳細な描写（「プロローグ」）から始まり、旧島民一世への聞き取りでは改めて故郷への強い想い、楽しい思い出、そして困難な状況を知ります。日常の幸福と、戦争がこれほど長く、多くの人生（さらに何世代にも渡って）に影響を及ぼすか。是非、多くの方々に読んでいただきたい一冊です。👉



「旧島民がなぜ故郷に帰れないのかその謎を読者といっしょに解いていく本です。わたしは執筆終盤に倒れて、臨死体験をしましたまさに“死なないと、書けない本”となりました」（著者談）



現在の《硫黄島》。自然の中に残された戦跡「高射砲陣地」。この島が戦場であったことを静かに伝えている。2026年7月27日 撮影：関根詩帆

【特集】戦後八十年を迎えて
「国内各地で若い人たちが戦争を知ろうとし、次の世代の語り部として育ち、戦中・戦後の苦労を語り継ぐ活動が進められていることは、戦後八十年を迎える今日、一層意義深い」

—令和七年二月二〇日
天皇陛下記者会見でのお言葉

二〇三五年（令和七年）は戦後八十年となる年で、天皇皇后両陛下は「戦没者慰霊の旅」に出発されました。

最初の訪問地である《硫黄島》は、両陛下にとつて初訪問でした。四月七日に到着され、天山慰霊碑、硫黄島島民平和祈念墓地公園、鎮魂の丘をご拝礼になり（写真下）、遺族・旧島民団体の関係者と懇談されました。

全国硫黄島島民の会代表として参加した会長・西村怜馬は「とても緊張しましたが、両陛下とも私たちの活動についてご存知で話しかけてくださいました」とのことです。

また、両陛下は八月二六日には静養先の那須御用邸付属邸にて、硫黄島旧島民で、那須在住の原ヤイ子さん（昭和六年生まれ、玉名山部落出身）と渡部敦子さん（昭和五年生まれ、漂流木部落出身）のお二人と懇談されました。



硫黄島の思い出の味：アナナ（釈迦頭）



3世の会メンバーと渡部敦子さん（中央）

後日、渡部敦子さん（旧島民一世）の娘・久美さん（二世）に今回の懇談のこと、硫黄島での思い出を聞きました。

《那須御用邸付属邸での懇談》

久美 両陛下は硫黄島旧島民が那須に住んでいるということもご存知でした。

渡部 お話したのは今回初めて。大変でしたね、って声をかけてくれたの。陛下と握手しましたのよ！

久美 最初は二十分くらいの予定が話が盛り上がり、て五十分くらいに。

《硫黄島での生活》

渡部（親戚の）おじさん達が船を持ってきたから、一日中、サザエ採ったり、魚とって食べたり。「ザル」ってウニのことね。ウニなんかもとれたの。（親戚の）おじさん達みんな漁師してたから、魚は届くのよ。それを干物にして東京に小包で送ったり。鯉節も自分のところで作って。干物は網の中に入れていっぱい干してね。それでほら、冷蔵庫は氷の冷蔵庫。

●島に氷屋さんがあったんですよ？！

渡部 そう。

●かき氷もあったんですよ。

渡部 学校の帰りに必ずかき氷食べて帰ったんだから（笑）硫黄島は一年中暑いんだもん！



「那須での懇談」 写真1：日本雑誌協会代表取材／主婦と生活社・伊藤和幸撮影



「硫黄島での両陛下」 写真2：日本雑誌協会代表取材／新潮社・本田武士撮影



硫黄島の昔の地図を見ながら。西部落から漂流木海岸あたり。



2025年9月20日那須の自宅にて

わたべ・あつこさん
一九三〇年（昭和五年）硫黄島生まれ
島の北西の「漂流木部落」で暮らす。
「那須は開拓地で、硫黄島の人が
いっぱい住ってたんだ。うち来て
島寿司みんな食べて、カラオケ
歌ってよく集まっていたの」

渡部（旧島民の）同級生とね、いつしよに硫黄島に帰って、年金で暮らしながらなんとか元の硫黄島にするように（暮らして）いこうね、なんて頑張ってたのよ。だけど、「人亡くなり、みんな亡くなっちゃったの」。

今でも、しよっちゅう島寿司は作ってるの。近所の人にも作り方を教えてね。こんどゆっくりいらつしやい、寿司のひとつでも作るから（笑）

久美 母はもてなすのが好きだから、いっぱい用意するんですよ！

●宴会好きな硫黄島っばいですね！

渡部 みんな食べさせて、（残ったら）持って帰らせるのははは。

—渡部敦子さんには二〇三五年に二回、二〇二六年にも一回、ご自宅にお伺いして聞き取りを実施しました。明治学院大学社会学・社会福祉学研究「インタビュー記録」にて発表予定（明治学院大学社会学・社会福祉学研究」169号（二〇二七年二月）にて刊行予定です。